

教育論者としてのアドルノの肖像

白 銀 夏 樹

はじめに

テオドール・W・アドルノ (Theodor Wiesengrund Adorno, 1903-1969) の著作の全体からみると教育を扱った論考はさほど多くない。講演・対談集『成人性への教育 (Erziehung zur Mündigkeit)』(1970年) が今なお版を重ね、また彼の思想が1960年代後半から70年代にかけて当時の西ドイツの教育学を席卷した解放的教育学 (emanzipatorische Pädagogik) などに影響を与えたことはよく知られているが、彼の著作はむしろ哲学・社会学・文芸批評・美学そして音楽論によって多く占められている。またアドルノが教育学者ではなく、しかもナチスドイツの時代に亡命していたことから、彼の教育論は当時の教育の実態を知らない素人談義として非難することも可能かもしれない。だがアドルノの生涯をつぶさに見てみると、教育について独自の知見を持つに至った彼の背景を確認することができる。たとえば音楽教育論については、自らの生業として音楽家の選択を捨てていなかった1930年代にさかのぼることができる。またアドルノが1959年から公にしてきた教育論には、実は亡命時代からフランクフルト社会研究所 (Institut für Sozialforschung) においてアドルノが関与した幾多の研究の痕跡を確認することができる。『成人性への教育』などに収録された教育論では、こうした研究にアドルノ自身はほとんど言及していないが、彼の教育論の背後にある研究や交流を確認することには意義があるように思われる。

本論文では、アドルノの生涯を伝記的に追いながら、彼の教育論をその生涯の文脈の中で位置づけていくことを課題とする。アドルノの伝記については2003年のアドルノ生誕100年の折りに重要ないくつかの伝記的著作が公刊された¹⁾。またアドルノの教育論に関しては遺稿調査を中心としたパフラーの研究があるが [Paffrath 1992]、それ以後の研究によって社会研究所における教育学的研究の実態がより詳しく明らかとなってきた²⁾。本論文ではこうした先行研究に基づきながら、さらにマックス・ホルクハイマー資料館 (Max Horkheimer Archiv) の未公開資料も活用することで、アドルノの教育論の背景を再構成する。なお本論では、教育論に直結しない伝記的エピソードや著作にも適宜言及するが、

それは彼自身が受けた教育、研究や思想をめぐる人間関係、社会研究所における立場や彼自身のユダヤ的アイデンティティの変化も、彼の教育論とは無関係ではないと思われるからである。ただし本論ではあくまで彼の教育論の背景を伝記的に再構成するにとどめ、個々の教育論の詳細や他の著作との関係の分析は別稿に譲りたい。

1. アドルノの生い立ちと初期の研究活動

1903年9月11日、フランクフルトにアドルノは生まれた。ユダヤ系の姓を持ちながらプロテスタントの洗礼を受けた同化ユダヤ人の父オスカー・アレクサンダー・ヴィーゼングルント (Oscar Alexander Wiesengrund) は裕福なワイン商であり、長いイギリス滞在の経験もあってリベラルで寛容な人物だったといわれる。母マリア (Maria) の旧姓はカルヴェリ=アドルノ・デラ・ピアナ (Calvelli-Adorno della Piana) であり、コルシカ出身でフランス国籍を持つフェンシングの名手の父と歌手の母の間に生まれ、自身もオペラ歌手として名を成していた。敬虔なカトリックで夫よりも5歳年長であったマリアは独り息子にフランクフルト大聖堂でカトリックの洗礼を受けさせ、テオドール・ルードヴィヒ (Theodor Ludwig) の名を与えられたこの子どものために、同居していたピアニストの妹アガテ (Agathe) とともに音楽と教養にあふれた教育を施した³⁾。この母と叔母の影響はアドルノにとって非常に大きく、彼はその活動の初期から姓をヴィーゼングルント=アドルノ (Wiesengrund-Adorno) を名乗り、また後年の対談「教育——何のために (Erziehung - wozu?)」(1966年放送) などでも愛慕を交えながらこの音楽的環境を振り返っている。また彼は家族でたびたびバイエルン州のアモールバッハで休暇を過ごしていたが、その甘い思い出もアドルノの論考にしばしば登場している [Vgl. GS 10-1: 302 ff.]。

アドルノは6歳でドイツ騎士団中等学校に入学し、続いてカイザー・ヴィルヘルム・ギムナジウムに進んだ。ギムナジウム時代の愛読書はルカーチ (Georg Lukács) の『小説の理論 (Die Theorie des Romans)』(1920年) やブロッホ (Ernst Bloch) の『ユートピアの精神 (Geist der Utopie)』(1918年) であり、14歳も年長の友人クラ

カウアー (Siegfried Kracauer) と定期的にカント (Immanuel Kant) の『純粹理性批判 (Kritik der reinen Vernunft)』を読んでいて、またギムナジウムの国語教師ツィッケル (Reinhold Zickel) はアドルノにとって忘れがたい人物であり、対等な議論の相手として認められたこと、あるいは空虚な決まり文句の濫用を時に冷静に諷められた思い出を振り返っている [GS 20-2: 756 ff.]。アドルノはギムナジウムで飛び級と首席卒業を果たし、アビトゥーア合格前からホーホ音楽院で作曲とピアノを学び始めたが、他方でこの華奢で内気な優等生は、他の生徒の羨望と嘲笑の的となっていたようである。プロテスタントの堅信札を受けながらもユダヤ的な姓を持った少年が他の生徒から受けた苦痛は、後にナチズムの原像として振り返られる [GS 4: 219 f.]。ところで、ギムナジウム時代の1919年、『フランクフルト生徒新聞 (Frankfurter Schüler-Zeitung)』第一号に「教師と生徒の関係の心理学 (Zur Psychologie des Verhältnisses von Lehrer und Schüler)」と題されたアドルノの文書が掲載された。ギムナジウムでの生徒と教師の対立関係を分析したもののだが、大人への反抗の空気がギムナジウムにも及んでいた青年運動の只中にもかかわらず、教師に対する生徒の側の偏見を厳しくアドルノが批判していることは注目できよう [GS 20-2: 715 ff.]。この生徒時代の体験と見解は、子どもの社会化における権威、あるいは教師と生徒の関係をめぐる後のアドルノの発言にもつながっていく。

1921年からアドルノは商業都市の市民層に支えられた新興大学であったフランクフルト大学に入学し、哲学、社会学、心理学、そして音楽理論を学んだ。哲学の教授であるコルネリウス (Hans Cornelius) のもとで論文『フッサール現象学における物的なものとの超越 (Die Transzendenz des Dinglichen und Noematischen in Husserls Phänomenologie)』を著し1924年夏に博士号を取得したが、この学生時代に終生彼に影響を与え続ける重要な人々と出会っている。1922年にはゲシュタルト心理学の演習で当時コルネリウスの助手を務めていたホルクハイマー (Max Horkheimer) と出会った。1923年にはすでに批評家として活動していたベンヤミン (Walter Benjamin)、そして後に妻となり口述筆記のパートナーも務めたマルガレーテ・カルプス (Margarete Karpuls)、通称グレーテル (Gretel) と出会った。

博士号取得の前から音楽専門誌に楽曲批評やコンサート批評を掲載するなど音楽家を志していたアドルノは、1925年にはウィーンに長期滞在し、作曲家ベルク (Alban Berg) を師と仰ぎながら新ウィーン楽派の巨匠シェーンベルク (Arnold Schönberg)、作曲家クシェネク (Ernst Krenek)、ピアニストのシュトイアーマン

(Eduard Steuermann)、バイオリニストのコーリッシュ (Rudolf Kolisch) といった人々との知己を得た。とりわけ三歳年上のクシェネクとは音楽専門誌の『アンブルフ (Anbruch)』や『23』の共同編集者として、当時の新音楽をめぐる議論を戦わせた。その一方で大学教員資格の取得もめざし、フロイト (Sigmund Freud) の精神分析理論に依拠した「超越論的霊魂論における無意識の概念 (Der Begriff des Unbewusstseins in der transzendentalen Seelenlehre)」を1927年に完成させるが、指導教授のコルネリウスと相談の結果、提出を断念した。『アンブルフ』の編集協力者として販売部数の低迷した雑誌の再建に尽力するが結局は失敗し、音楽家としての活動にも行き詰まりを感じる中、1929年にはコルネリウスの後任シェラー (Max Scheler) の突然の死去の後、フランクフルト大学に哲学教授として着任した神学者ティリッヒ (Paul Tillich) のもとで、改めて教員資格論文に挑戦する。このきっかけのひとつが、ベンヤミンの『パッセージ論 (Passagen-Werk)』の草案に受けた刺激だったといわれる [Müller-Doohm 2003: 185 f.=2007: 141]。ベンヤミンの方法を用いながらキルケゴール (Søren Kierkegaard) の美学の再構築を試みたアドルノの教員資格論文はティリッヒと当時社会哲学の教授となったばかりのホルクハイマーによって審査され、1931年2月にアドルノは教員資格を得た。同年5月に行われたフランクフルト大学の私講師就任講演「哲学のアクチュアリティ (Die Aktualität der Philosophie)」、そして翌年のカント学会での講演「自然史の理念 (Die Idee der Naturgeschichte)」では、ベンヤミンの影響とハイデガー (Martin Heidegger) への批判がはっきりと表明され、アドルノの思想の原点として注目される。

哲学の私講師としてアドルノは授業でベーコン (Francis Bacon)、デカルト (René Descartes)、ヘーゲル (Georg Wilhelm Friedrich Hegel)、キルケゴール、ジンメル (Georg Simmel) などの哲学のほか、フォルケルト (Johannes Volkelt) の美学、ハンズリック (Eduard Hanslick) の音楽美学、ベンヤミンの『ドイツ哀悼劇の根源 (Ursprung des deutschen Trauerspiels)』(1928年)、そしてレッシング (Gotthold Ephraim Lessing) の『人類の教育 (Die Erziehung des Menschengeschlechts)』(1780年)を扱った。レッシングの演習はティリッヒとともに実施したもののだが、教育学への造詣も深かったティリッヒにアドルノは望ましい教師の姿を見ながら教育学への理解を得たといわれる [Paffrath 1992: 49 f.]。ホルクハイマーとの親交は変わらず、彼が1931年から所長を務めることとなった社会研究所の新たな機関誌『社会研究誌 (Zeitschrift für Sozialforschung)』(1932年創刊)に⁴⁾、「音楽の社会的状況によせて (Zur gesellschaftlichen Lage der Musik)」(1932年)を寄稿し

た。フランクフルト放送のラジオ番組に定期的に出演し現代音楽の紹介も行っていただけであり、この研究所でアドルノは哲学ではなく音楽文化の担当者として位置づけられていたが、いまだ正式な所員とはなっていなかった。

2. 亡命時代 ——ユダヤ人としての意識形成と反ユダヤ主義研究——

アドルノ自身が回顧するところによれば、1933年3月、大学教員資格論文を大幅に修正した『キルケゴール——美的なものの構成 (Kierkegaard. Konstruktion des Ästhetischen)』を出版したその日に、ヒトラー (Adolf Hitler) が独裁権を握った [GS 2: 261]。同月の社会研究所の閉鎖、そして翌月の職業官吏再建法のいわゆる「アーリア条項」による「非アーリア人」公務追放政策によって、ティリッヒやホルクハイマーらユダヤ人教授陣の大学教員資格が剥奪され、アドルノも同年9月に同じく資格を失った。社会研究所はすでに1931年には支部をジュネーヴに開設し、基金もオランダに移していたため、フランクフルトの研究所が閉鎖される前にホルクハイマー、ポロック (Friedrich Pollock)、レーヴェンター (Leo Löwenthal)、フロム (Erich Fromm)、マルクーゼ (Herbert Marcuse) といったほとんどのユダヤ人の所員はフランクフルトを離れていた。しかしアドルノは、後にその状況判断を過ちと認めているが [GS 19: 637 ff.]、当初は亡命の意図を持ってはいなかった。血縁的には「半ユダヤ人 (Halbjude)」であるが、ユダヤ的文化と距離を取っていたアドルノは⁵⁾、しばらくフランクフルトで音楽教師など音楽に携わりながら国内に留まるすべを探った。しかし同年7月には家宅捜索を受け、音楽教師の道は「非アーリア人」ゆえに閉ざされ、さらに当時はナチスに公認されていたユダヤ文化同盟 (Kulturbund Deutscher Juden) へと接近を試みるも「半ユダヤ人」でクリスチャンのアドルノには加入が認められなかった。ウィーン大学への教員資格の移転も失敗した。結局は父の薦めに従い、父方の叔父の住むイギリスに1934年4月に移ったが、大学教員の資格は認められなかったため、オックスフォード大学のマートン・カレッジで言語哲学者ライル (Gilbert Ryle) のもと、大学院生としてフッサール現象学をテーマにした博士論文に着手した。その後、ニューヨークに移りコロンビア大学の支援を受けていた社会研究所のホルクハイマーから連絡があり、博士号取得後の常任研究員としての雇用を示唆されたことから、アドルノは博士論文の準備の傍らパリに亡命中のベンヤミンやクラカウアーと社会研究所の仲介役を務めた。また『社会研究誌』に寄稿した「ジャズについて (Über Jazz)」(1936年)などの音楽分析を、

ユダヤ的出自を連想させない偽名ヘクトール・ロットヴァイラー (Hektor Rottweiler) で公にするほか、1935年に亡くなったベルクに捧げられた論文集への寄稿なども行った⁶⁾。

この時期のアドルノにおいては、音楽批評の一環で記された同時代の音楽教育への批判的なコメントに注目できる。1932年に『フランクフルト新聞 (Frankfurter Zeitung)』に「楽師音楽への批判 (Kritik des Musikanten)」を掲載した。またクシェネクの講演「音楽教育に作曲家は何が期待できるか (Was erwartet der Komponist von der Musikerziehung?)」(1936年、『23』26/27号に掲載)に対して、アドルノは「音楽教育的音楽——エルンスト・クシェネクへの書簡 (Musikpädagogische Musik. Brief an Ernst Krenek)」(1936年、『23』28/30号にロットヴァイラーの名で掲載)を寄せた。当時の青年運動と連動した歌唱・演奏を偏重する音楽教育の流行を批判し、正統なクラシック音楽の正確な聴取を重視したクシェネクの論調はアドルノの音楽論にも共通するところがある。アドルノはこの公開書簡でクシェネクの批判をより先鋭化して同時代の音楽教育の共同体志向を批判するが、クシェネクの立脚する作曲者の高踏的な視座も批判し、音楽と社会との媒介という視点を加えようとしたのだった [GS 18, 805 ff.]。

1937年、ホルクハイマーを立会人として招いたグレーテルとの結婚式の後、ニューヨークに戻ったホルクハイマーから、プリンストン大学の社会学者ラザースフェルト (Paul Felix Lazarsfeld) ——彼もウィーンからの亡命ユダヤ人だった——のもとでラジオの社会学的調査を行う研究員としての渡米を提案された。グレーテルとの結婚によってニュルンベルク法の定める「ユダヤ人」となったこともあり、アドルノはアメリカのビザを獲得し、1938年2月にニューヨークに移った。ただし当時のアメリカではユダヤ人の受け入れが制限されていたこともあり、これまで名乗っていた「ヴィーゼングルント＝アドルノ」を改め、「ヴィーゼングルント」を「W.」に略し、自らの姓を「アドルノ」とすることになる。

ラジオ調査研究においてアドルノには音楽社会学的な分析が期待されていたが、その方法についてラザースフェルトとの対立が大きく、1940年にアドルノはプロジェクトから退く。しかしこのプロジェクトはアドルノにとって無意味なものではなく、「構造的聴取」と呼ばれる音楽の正しい聴取のあり方を考察し、またそうした聴取者を育てるラジオ番組のシナリオをアドルノが書くに至ったことを考慮してみても、音楽教育的な思索につながるものだったといえる [Müller-Doohm 2003: 386 ff. =2007: 298-301]。社会研究所の財政的窮乏もあって入国当初のアドルノは共同研究員でしかなかったが、ラジオ調査研究後には常任研究員の地位を認められ、時にホ

ルクハイマーの代理を務めることもあった。『社会研究誌』とその後継の『哲学・社会科学研究 (Studies in Philosophy and Social Science)』誌には、1941年の第9巻第3号を以て休刊するまで複数の論文を寄稿し⁷⁾、またこの雑誌の編集担当者としてベンヤミンと彼のボードレー論をめぐって議論を戦わせた。またホルクハイマーと『啓蒙の弁証法 (Dialektik der Aufklärung)』に結実する議論をスタートさせる一方、1939年にホルクハイマーが準備した「反ユダヤ主義調査プロジェクト (Research Project on Antisemitism)」(公表は1941年)に呼応して、アメリカの財団からの資金獲得のために反ユダヤ主義とナチズムの研究プロジェクトの構想をホルクハイマーに複数提示していた。そうした中で1940年、両親のアメリカ亡命が成功し再会を果たすが、もうひとり待ちわびていたベンヤミンの自死の知らせを10月に受け取り、妻と共に絶望する。

1941年11月、健康上の理由から同年春にロサンゼルスに移動したホルクハイマーを追って、アドルノ夫妻はロサンゼルス近郊のサンタモニカに新居を構えた。この地ではホルクハイマーだけでなくマン (Thomas Mann)、ブレヒト (Bertolt Brecht)、シェーンベルクらで構成された亡命者たちのサークルの一員となった。ニューヨーク時代から書き継いでいた著作『新音楽の哲学 (Philosophie der neuen Musik)』の草稿はマンの小説『ファウスト博士 (Doktor Faustus)』(1947年)に着想を与え、さらに音楽における自然支配という主題がホルクハイマーの共感を呼び、1942年から2年にわたって『哲学的断想 (Philosophische Fragmente)』(1944年)の共同執筆に力が注がれる。少数印刷されたこの著作に若干の加筆がなされ、第二次大戦後アムステルダムで出版されたのが、後にフランクフルト学派の代名詞となった『啓蒙の弁証法——哲学的断想 (Dialektik der Aufklärung, Philosophische Fragmente)』(1947年)である。また休刊した『社会研究誌』『哲学・社会科学研究』誌の特別号として『ベンヤミン追悼号 (Walter Benjamin zum Gedächtnis)』(1942年)の編集や⁸⁾、映画のBGMに前衛音楽を利用する意義の調査研究を行った⁹⁾。そのほか、このロサンゼルス時代、アメリカ市民権取得、ニューヨークの父の死、そして帰国後のドイツで最初にアドルノを有名にした『ミニマ・モラリア (Minima Moralia)』の執筆と並行して、後の「過去の克服」をめぐるアドルノ教育論の源泉となる研究が遂行された。それが大規模な社会調査を伴った反ユダヤ主義の共同研究である。

1942年から43年にかけてユダヤ労働者委員会 (Jewish Labor Committee) とアメリカ・ユダヤ委員会 (America Jewish Committee) から複数年にわたる資金援助が続けて約束され、社会研究所は財政的な安定を得た。前者

の援助対象となった研究プロジェクト「アメリカの労働者における反ユダヤ主義 (Antisemitism among American Labor)」ではアメリカのブルーワーカーの多くに反ユダヤ主義が確認され、反ユダヤ主義をドイツ特有の現象ではなく世界史的現象として捉えようとするアドルノらの見解が裏付けられた [Vgl. Ziege 2009]。そして後者の援助対象となった研究プロジェクトは1941年公表のものを発展させた「反ユダヤ主義調査プロジェクト」であったが¹⁰⁾、社会研究所だけでなくコロンビア大学やシカゴ大学——心理学者として有名になるオーストリアの亡命ユダヤ人ベッテルハイム (Bruno Bettelheim) も参加した——など複数の大学の研究者と共同で行われる大規模な調査プロジェクトとなった。ホルクハイマーとともにこの調査の心理学的なアプローチを主導することになったアドルノは、カリフォルニア大学バークレー校で世論調査を行っていたサンフォード (R. Nevitt Sanford)、フレンケル＝ブルンスヴィク (Else Frenkel-Brunswik)、レヴィンソン (Daniel J. Levinson) らと研究を進めた。精神分析的力動論に依拠した社会調査で実績をあげていたこのグループとの関わりは、アドルノにとって社会調査の意義を認めさせるものとなった。最終的にこのグループとの研究の成果は、ホルクハイマーとフラワーマン (Samuel H. Flowerman) の監修する「偏見の研究 (Studies in Prejudice)」シリーズの第一巻である『権威主義的パーソナリティ (The Authoritarian Personality)』(1950年)に結実した¹¹⁾。この著作はファシズムに親和性のあるパーソナリティ類型をさぐるファシズム尺度 (F-Scale) によって広く知られるようになり、アメリカの社会心理学の古典となった。そしてアドルノがドイツ帰国後に取り組んだ社会学的研究から60年代の教育論に至るまで、この研究成果にアドルノは繰り返し言及している。

なお、このプロジェクトとの関連で、後の教育論に反映される三つの事柄にも触れておきたい。第一は「子ども研究 (Child Study)」の構想である。反ユダヤ主義調査プロジェクトは9つのパートに分かれていたが、そのひとつにこの研究が位置づけられていた [Wiggershaus 2001: 420 f.]。1944年の冬にアドルノは、小学校段階の子どもにおいて反ユダヤ主義が芽生えると仮説を立て、オーストリアからの亡命者で発達心理学者であったフレンケル＝ブルンスヴィクとの共同研究を企図した。その研究は実現しなかったが、彼女との出会いとこの着想をアドルノはドイツ帰国後も何度か振り返っており、この着想にかかわる彼女の研究に後の教育論でも言及している [EzM, 139 f.]。第二に、反ユダヤ主義の研究の一環で反ユダヤ主義的メッセージを発信するプロパガンダの分析にもアドルノが携わった点である。プロパガンダのテクニクの類型をレーヴェンタールやマッシング

(Paul W. Massing) とともに分析したアドルノは、そのテクニクの社会的啓蒙が大衆扇動を回避するためには必要だと考えるに至った¹²⁾。そして最後に、戦後ドイツの「再教育 (Umerziehung/re-education)」にかかわる研究プロジェクトである [丸山 2006]¹³⁾。1942年の夏、アメリカ・ユダヤ委員会から資金を得るための折衝を重ねていた頃、すでに社会研究所では「ドイツの狂信的愛国主義者の除去に関するメモ (Memorandum on the Elimination of German Chauvinism)」が著され、教育政策とレジヤ政策による戦後ドイツの「狂信的愛国主義者」対策が提案されていた¹⁴⁾。そしてドイツの敗戦後、アメリカ占領地区の「再教育」に実際に関与したアメリカ・ユダヤ委員会に対して、社会研究所は研究計画やアイデアなどを提供した。アドルノも1947年にアメリカ占領軍の再教育当事者へのインタビューをポロックと共にに行い [MHA IX 172. 18]、また1949年に社会学による啓蒙についてメモを残している [MHA IX 172. 1h]。この「再教育」についてはホルクハイマーが主導したものはあるが [Demirović 1999: 101 ff.=2010 (vol. 3): 62-68]、1949年にアドルノが著した「民主的リーダーシップと大衆操作 (Democratic Leadership and Mass Manipulation)」にもうかがえるように、教育による戦後ドイツの民主化という関心をアドルノはホルクハイマーと共有していた。

3. ドイツ帰国をめぐる ―戦後ドイツの民主化と社会研究所の再建―

フランクフルト大学内外からの帰還の呼びかけに応え、ホルクハイマーは1949年にフランクフルト大学に復帰し、同年に哲学部の学部長、翌年の1951年にはフランクフルト大学学長に選出された。アドルノは1949年、ホルクハイマーの代講者として15年ぶりにフランクフルトに戻り、1950年にはユダヤ人教員の大学追放への補償措置の一環で組織計画外の員外教授という地位を得たが、それは安定したものとはいえなかった。ニューヨークにいた母の死には駆けつけることができず、しかしアメリカの市民権を維持するために1952年の秋から10か月アメリカに滞在し、ハッカー財団の調査主任としてテレビ研究とホロスコープ研究を進めた¹⁵⁾。その後1953年7月に組織計画内の員外教授として認められ、翌月ドイツに戻り、その後は二度とアメリカの地を踏むことはなかった。

この時期のアドルノの個人的業績としては、まずアメリカで書き溜めていた『新音楽の哲学』(1949年)、『ミニマ・モラリア』(1951年)、『ヴァーグナー試論 (Versuch über Wagner)』(1952年)のドイツでの公刊が目玉である。特に『ミニマ・モラリア』の好評によっ

て知識人界での知名度は高まった [Demirović 1999: 153 ff.=2011 (vol. 4): 48-52]。また、ベンヤミンとかつて何度も語り合ったカフカ (Franz Kafka) を扱った「カフカ覚書 (Aufzeichnungen zu Kafka)」(1953年)などの文芸批評が『ノイエ・ルントschau (Die Neue Rundschau)』誌に掲載され、文芸批評家としても注目されるようになった。『啓蒙の弁証法』の書評もこの時期に複数の雑誌に現れた。そして音楽家としては、今も前衛音楽の中心として知られるダルムシュタット国際現代音楽夏期講習会に1950年から参加し、理論的講義にとどまらず自らの曲の演奏も行っていた。

しかしドイツでのアドルノの日常は社会研究所の業務に忙殺されていた。ホルクハイマーの大きな関心は戦後ドイツの民主化にあり、その担い手となる人文的・社会的な教養を基盤とした批判的で民主的な人間の形成のために彼は研究と教育と大学運営に力を注いだ¹⁶⁾。その象徴となったのが社会研究所のフランクフルトでの再建 (1951年) であり、この時期の研究所における社会学の教育・研究活動と成果の社会的発信はめざましいものだったが、ホルクハイマーの裏方として実務にあたったのがアドルノだった。この実務は―後の実証主義論争のアドルノのイメージとは大きく異なるかもしれないが―経験的調査研究に対するアドルノの肯定的な見解に支えられていたといえる。当時のアドルノは、経験的調査研究の代表者を自負し [Demirović 1999: 750=2011 (vol. 4): 112]、ドイツの民主化に経験的な調査研究が役立つと考えていた [GS 8, 478 ff.]。そして調査研究の対象だけでなく研究成果を反映させる場としても大学教育に力を注いだのだった。

この時期のアドルノ自身の教育活動としては、フランクフルト大学で哲学の講義と演習を担当し、また社会学教育の一環として社会研究所の調査に学生たちを参加させた。そして専門的に社会学を学び修了するドイツ初の教育課程を社会研究所に開くために尽力し、1955年にスタートさせた [Demirović 1999: 406=2011 (vol. 1): 190]。さらにアドルノはホルクハイマーのために大学入学式講演の原案も作成しており、その遺稿は彼の教育観をうかがわせるものとなっている¹⁷⁾。

研究面では、社会研究所の正式な再開の前からすでに複数のプロジェクトが進められていたが、アドルノはその多くに関与した [Vgl. MHA IX 69]。1950年から実施された「グループ実験 (Gruppenexperiment)」は当時の社会研究所を代表する研究であった。この研究は一般市民や大学生に敗戦や国家観や人種観をめぐるグループディスカッションをさせ、そこで浮かび上がる非公式の世論 (nicht-öffentliche Meinung) を通して戦後のドイツ人のステレオタイプ的で体制順応的な意識を解明しようとするものであり、その目的的政治性や方法の独自性

が注目を集めた。この成果はポロックを編者として1955年に公表されるが、特にドイツ人に過去の罪責意識を厳しく問い立てるアドルノ担当の「罪責と防衛 (Schuld und Abwehr)」の章に対して心理学者ホフシュテッター (Peter R. Hofstätter) が批判を行い、アドルノも議論に応じるという、いわゆるアドルノ＝ホフシュテッター論争が起こった [白銀 2015]。

また、この時期の社会研究所のプロジェクトのひとつ「大学と社会 (Universität und Gesellschaft)」にも、研究所の政治性を見てとることができる。1951年からはじまったこの調査研究は、ジョージ・ワシントン比較社会科学研究所 (George-Washington-Institut für vergleichende Sozialwissenschaft) と共同で着手され、対独高等弁務府 (HICOG)、ドイツ学術振興会、フランクフルト国際教育大学、大学協会、文部大臣会議、学長会議などの支援を受けた [Vgl. Demirović 1999: 198 ff. = 2009 (vol. 2): 9-45]。このプロジェクトは、大学生、経済と行政の専門家、大学教授へのアンケート調査をもとにして、戦後のドイツの大学のあり方について政策的提言を行おうとするものであり、その焦点となったのが戦後ドイツの民主化と大学教育の関係であった。このプロジェクトの運用のためにアドルノは尽力し、その成果報告書の序文をホルクハイマーとの連名で著しているほか [GS 20-2, 685 ff. Vgl. AHB IV, 890 ff.]、後にはエーラー (Christoph Oehler) との連名で「大学教育への学生の期待に従属する職業的教育目標 (Die Abhängigkeit des Ausbildungszieles von den Studierenerwartungen der Studenten)」(1957年) を発表した [GS 20-2, 689 ff.]。

またアメリカの資金で設立されたダルムシュタット社会科学研究所 (Darmstädter Institut für sozialwissenschaftliche Forschung) と社会研究所とが1949年に開始した通称「ダルムシュタット地域研究 Darmstädter Gemeinstudie)」でアドルノは1950年から主導的な役割を果たした [Vgl. Demirović 1999: 339=2009 (vol. 1): 123]。この研究は第二次大戦で爆撃を受けた地方都市の戦後の状況を社会的に分析し、戦後ドイツの民主化に寄与する知見を提供することを目的としており、アメリカ占領軍の委託を受けたものだった。調査自体は1952年のダルムシュタット社会科学研究所の閉鎖とともに終わったが、その成果は1952年から54年までの間に9冊の本で公にされた [Vgl. SE 138 ff.]。そのうちの8冊にアドルノは (一部はロルフエス (Max Rolfes) との共著であるが) 序文を寄せ、青少年や家族を対象とした研究からステータス意識やメリット志向などに注目している [GS 20-2, 605 ff.]。

さらにアドルノはドイツの教育制度に残存する権威主義の分析という研究プロジェクトの構想も練っていた。1950年、アドルノは「ドイツの学校制度における権威の

問題の研究 (Studie zum Problem der Autorität im deutschen Erziehungswesen)」というアイデアのメモをホルクハイマーに送っている [AHB IV, 37]。結局この「教育学研究 (die pädagogische Studie)」は資金の見込みが立たず [a. a. O., 156]、実現には至らなかった。また同じく実現しなかったが、この時期には社会研究所内にユネスコの支部が置かれる可能性も検討されていた [Demirović 1999: 310 ff. = 2009 (vol. 1): 91-107]。占領国によるドイツ民主化のための「再教育」の一環でドイツに支部を設置しようとしていたユネスコは、先進的な社会心理学の研究拠点として社会研究所を評価していたため、ホルクハイマーとアドルノに接触し、彼らもユネスコ支部の誘致に積極的だった。

当時の社会研究所の活動は戦後ドイツの民主化をめざした政治性の高いものであり、この観点から戦後ドイツの教育をアドルノは理解したといえる。また、ヘッセン州高等学校教員採用試験の哲学面接試験に携わりはじめたことや、ホルクハイマーを通して知り合ったベッカー (Hellmut Becker) との親交も看過できない。弁護士であったベッカーは社会研究所の顧問として研究プロジェクトの状況を把握し、社会研究所の対外的な折衝にも関与していたが、彼自身の関心は私立学校や市民大学の支援にもあり、1956年にはドイツ市民大学連盟 (Deutscher Volkshochschul-Verband) 総裁に選ばれ、1963年にはベルリンにマックス・プランク教育研究所 (Max-Planck-Institut für Bildungsforschung) を創設しその所長を務めるに至った [遠藤 2004]。戦後ドイツの教育の現状を知る機会是这样した関わりによっても与えられていた。

4. 1950年代後半

——音楽教育論と大学生の政治意識——

帰国後のアドルノは、まず1954年にシカゴ大学の客員教授として一時的にアメリカに渡ったホルクハイマーに代わって社会研究所の実務をこなし、1955年には亡命によって失ったドイツ国籍を正式に再取得した。1957年にはフランクフルト大学の哲学・社会学正教授、1958年には社会研究所所長となり、ホルクハイマーの後任として自ら精力的に活動するようになる。この時期の著作としては、哲学ではイギリス時代の博士論文の準備の産物である『認識論のメタクリティーク——フッサールと現象学的アンチノミーに関する諸研究 (Metakritik der Erkenntnistheorie. Studien über Husserl und die phänomenologischen Antinomien)』(1956年) と『ヘーゲル哲学の諸局面 (Aspekte der Hegelischen Philosophie)』(1957年)、音楽論としては『不協和音——管理された世界の音楽 (Dissonanzen. Musik in der verwalteten Welt)』(1956年第一版、1958年第二版)、文芸・文化批

評としては『プリズメン——文化批判と社会 (Prismen. Kulturkritik und Gesellschaft)』(1955年)と『文学ノート (Noten zur Literatur)』第一巻(1958年)が挙げられる。特に『プリズメン』に収められた「文化批判と社会 (Kulturkritik und Gesellschaft)」(1949年執筆、1951年初出)の一節「アウシュヴィッツの後で詩を書くことは野蛮だ」[GS 10-2, 30]は当時の文学者たちの論議を呼んだ。他方で遺稿を委ねられていた『ベンヤミン著作集 (Walter Benjamin Schriften)』(1955年)の編纂や [Benjamin 1955]、また詩人ボルヒャルト (Rudolf Borchardt) の詩集 (1957年) の編纂にもあたった。

ところで『不協和音』に収められた音楽教育批判は独自の体系性を備えており、後の「過去の克服」をめぐる教育論とは異色の教育観をうかがわせる。1952年に現代音楽・音楽教育研究所 (Institut für Neue Musik und Musikerziehung) の総会に招かれた際、アドルノは世紀転換期からの青年運動に連動した青年音楽 (Jugendmusik) あるいは共同体音楽 (Gemeinschaftsmusik) への批判的な発言を行った [GS 14, 10 f.]。それをアドルノが要約的に著しこの研究所に提示した「音楽教育的音楽に対するテーゼ (Thesen gegen die musikpädagogische Musik)」(1954年執筆)が、彼の許可を得ないまま否定的注釈を施されて音楽教育誌『若き音楽 (Junge Musik)』に掲載されたことから、アドルノは自らのテーゼへの批判に因應するために、1956年にはラジオ講演として「楽師音楽への批判 (Kritik des Musikanten)」を公表し (論文としては『不協和音』第一版が初出)、さらに音楽教育誌『若き音楽 (Junge Musik)』に「音楽教育学によせて (Zur Musikpädagogik)」(1957年、『不協和音』への掲載は第二版より) を掲載した。この一連の論稿においてアドルノは、青年音楽・共同体音楽の運動に対して教養市民層の衰退と結びついた原初的な民族共同体への憧憬とファシズムとの共通性を認め、いまなおこの運動の残滓が同時代の音楽教育に見出せると批判している。この批判にはクシェネクに宛てた1936年の公開書簡「音楽教育的音楽」との共通性も認められるが、しかし青年運動とファシズムの共通性を批判の梃子として音楽教育のみならず戦後ドイツ芸術教育の主流となっていたミューズ教育 (musische Erziehung) も批判の射程に入れており、さらに音楽教育の実践のための具体的な提言を行ってもいる点で興味深い。

この時期の社会研究所の活動としてまず注目できるのは、帰国前から検討されていた『社会研究誌』の復刊が最終的に研究所叢書の刊行という形に落ち着き、アドルノが叢書の編者となったことである [Vgl. Demirović 1999: 479 ff.=2011(vol. 1): 269-298]。この「フランクフルト社会学叢書 (Frankfurter Beiträge zur Soziologie)」

の第一巻は『ゾチオロギカ (Soziologica)』(1955年)と題されたホルクハイマーの60歳記念論集となり、ここにはアドルノの「社会学と心理学の関係 (Zum Verhältnis von Soziologie und Psychologie)」が、ディアクス (Walter Dirks) と連名の序文とともに掲載された。そして第二巻『グループ実験 (Gruppenexperiment)』(1955年)、第三巻『企業の空気 (Betriebsklima)』(1955年)に続いて出版された第四巻『社会学の諸相——講義と議論 (Soziologische Exkurse. Nach Vorträgen und Diskussionen)』は、社会学の入門書として高い評価を得ることとなった。この本の執筆者は研究所全体だとされてはいるが [SE 7 f.]、原型となったホルクハイマーの連続ラジオ講義「現在の社会学 (Soziologie der Gegenwart)」はアドルノとホルクハイマーの協働によるところが大きく、本の出版のために加筆された部分もアドルノの草稿によるものが確認できる¹⁸⁾。この本以降も、この叢書に入れられたものの多くにアドルノは (連名のものもあるが) 序言をよせており、教育に関連するものも少なくない (後述)。社会研究所の研究対象として教育が明確に位置づけられていた証左といえよう。

またこの時期の社会研究所の大きかりな研究プロジェクトとして、「大学と社会」を継承した「学生と政治 (Student und Politik)」が行われた [Vgl. Demirović 1999: 223 ff.=2009(vol. 2): 45-76]。当時の大学では学生の政治活動への対応が課題の一つとなっており、西ドイツ学長会議のもとで教育学者ヴェーニガー (Erich Weniger) の主導する政治教育の検討委員会が組織されていた。アドルノは1954年にこの委員会に出席し、「大学と社会」の結果を学長会議に報告した後、当時社会研究所の助手を務めていたダーレンドルフ (Ralf Dahrendorf) とともに「大学と政治」プロジェクトの申請書を作成した結果、ドイツ学術振興会からの資金提供を受けることとなった。フランクフルト大学の学生を対象としたこの調査研究の結果が、ハーバーマス (Jürgen Habermas)、フォン・フリーデブルク (Ludwig von Friedeburg)、エーラー、ヴェルツ (Friedrich Welz) の共著『学生と政治 (Student und Politik)』(1961年)である [Habermas u. a. 1967]。権威主義的・体制順応的ではない「真の」民主主義的態度を30%程度の学生に認め、抵抗的な市民運動を含めた彼らの政治的参加に期待を寄せたこの研究に対して、ホルクハイマーとアドルノは詳細に目を通した [Vgl. Demirović 1999: 252 ff.=2009(vol. 2): 65-72]。学生の政治意識を過剰に刺激することを憂慮したホルクハイマーの懸念もあってフランクフルト社会学叢書としての出版は認められず、さらにハーバーマスの政治的態度に対するホルクハイマーの批判によって、ハーバーマスはフランクフルトを去ったともいわれる。アドルノはハーバーマスら執筆者とホルク

ハイマーの仲裁にあたりながらも、学生の政治参加に対するハーバーマスの期待感には疑念を挟んだ。ただし「学生と政治」のプロジェクトに関わって当時アドルノが公にしたものは、1959年のヘッセン放送でのラジオ講演「ドイツの大学の民主化 (Zur Demokratisierung der deutschen Universitäten)」(生前は未公開)に限られる [GS20-1, 332 ff. Vgl. 白銀 2005]。

この時期のアドルノはベッカーとの関係で、教育にかかわる議論に個人的にも参加した。1954年2月、カルフ教授・教育アカデミー (Die Akademie für Unterricht und Erziehung Calw) に招待され、教育社会学的な議論を行った [Paffrath 1992: 19 f.]。また1956年にフランクフルトで行われたドイツ市民大学会議 (Deutsche Volkshochschultag) の総会で「成人教育のアクチュアリティ (Aktualität der Erwachsenenbildung)」を講演したが [GS 20-1, 327 ff.]、その原稿は全国紙『ツァイト (Die Zeit)』に掲載され¹⁹⁾、多くの人の目に留まった。またこの年にベッカーとアドルノはヘッセン放送で対談「啓蒙は救いになるのか (Kann Aufklärung helfen?)」も行っている。なお1957年ごろには「余暇の問題に関する民衆教育 (Volksbildung über Probleme der Freizeit)」という研究プロジェクトをハーバーマスが提案し、アドルノはその準備を進めていた [AHB IV, 419 f.]。結局このプロジェクトは実現しなかったが²⁰⁾、アドルノの教育への知見は大学教育だけでなく成人教育にまで及ぶこととなった。

5. 1959年からの教育論者としての活動 ——学会、研究所、ラジオ番組——

一般的なアドルノの伝記において1959年は特記される年ではない。しかし教育論者という観点でアドルノの生涯を見るなら、この年はある象徴的な社会的事件とともに注目することができる。

この年のクリスマス、ケルンのシナゴークで反ユダヤ主義的な落書きがなされた。同様の犯行が各地で続き、翌年2月にはその数が800件を超え [石田 2002: 145]、同月に連邦議会でも議論されるに至った。この事件によって、当時の西ドイツでは反ユダヤ主義が克服されていたのではなく、1950年代の経済復興の背後に潜在していたにすぎないことが露わとなった。そしてイスラエルでのアイヒマン裁判 (1961年) やフランクフルト・アウシュヴィッツ裁判 (1963年) が続き、「過去の克服」が社会問題化していった。

1959年は、教育学において繰り返し参照されてきたアドルノの二つの教育論「半教養の理論 (Theorie der Halbbildung)」と「過去の克服とは何か (Was bedeutet: Aufarbeitung der Vergangenheit)」が公となった年で

あるが、アドルノがこの年以降発信していった教育論の多くは、この事件の社会問題化と無縁ではない。アドルノ自身の社会意識と時代の要請が彼に教育を語らせ続けたと考えられる。ここでは1959年以降の教育をめぐるアドルノの発言や研究活動などについて、他の彼の履歴とは独立させて確認しておきたい。

(1) ドイツ社会学会における研究と活動

アメリカでの『権威主義的パーソナリティ』とそれ以降の研究によって、アドルノと社会研究所の経験的社会調査はドイツ社会学会 (Deutsche Gesellschaft für Soziologie) において一定の評価を得ていた。しかし1957年ごろからアドルノは経験的な調査の意義について一定の留保を見せるようになる。すなわち、一見すると価値中立的な調査研究は体制肯定的な側面を持ちうるため、そこから批判的な反省を導き出す哲学的な社会理論が必要だと訴えるのである。このような態度は1957年ごろから顕著になり、やがて実証主義論争へとつながっていくのだが [Vgl. Demirović 1999: 747 ff.=2011 (vol. 4): 109-131]、この社会哲学的な思想は彼の教育論の主題とも関連している。

アドルノの「半教養の理論」は、教育学において Bildung (教養・陶冶・人間形成) が論じられる際にしばしば参照される。これが最初に発表されたのは、1959年5月にベルリンで開催されたドイツ社会学会大会の教育社会学専門部会 (Fachausschuß für die Soziologie der Bildung und Erziehung) においてである。アドルノはこの部会の設立メンバーでもあった [Paffrath 1992: 22]。この講演でアドルノは、教養 (Bildung) が「半教養 (Halbbildung: 半可通)」に化したことを歴史的・社会的帰結として描きながら、社会への同化・適応にとどまらない教養の理念的な意義を認め、それは半教養への「批判的な自己反省」として果たされねばならないと述べた [GS 8, 121]。自然支配の社会的適応への転化という『啓蒙の弁証法』の歴史哲学と現代文化批判とを結び付けたこの議論は、これまでのアドルノの思想を教養論として収斂させたものといえる。そして歴史的・社会的な知を「批判的な自己反省」へ結びつけようとする論法は、その後のアドルノの教育論にも共通している²¹⁾。

また1963年には、アドルノはドイツ社会学会会長の職とともに、教育社会学専門部会の部会長を引き受けた。会長職を1967年まで務めたのに対して部会長は1964年に退くが、この短い在任期間中、複数回にわたる部会の会合において議論されたのが政治教育 (politische Bildung) であった。学校の生徒と教師の政治に対する関心の乏しさや権威性、そして現在の社会における学校の役割の問題点など、これまで学会のメンバーが蓄積してきた研究成果を共有するとともに、新たな研究課題や

教師教育・学校改革・授業改革の方向性などがここで議論された。アドルノは部長として社会学者の間で政治教育をめぐる共通理解と課題意識の共有をリードしたのだった [Paffrath 1992: 107 ff.]²²⁾。

他方で、アドルノの社会哲学は、社会学の社会的意義をめぐる議論をドイツ社会学会において活性化させた [Vgl. Demirović 1999: 741 ff.=2011 (vol. 4): 104-235]。1961年、ドイツ社会学会の会員限定の研究大会において、ポパー (Karl Popper) の講演に対するアドルノの発言をきっかけに社会学の方法論上の論争が起こり、アドルノはハーバーマスと論陣を張った。これが『ドイツ社会学における実証主義論争 (Der Positivismusstreit in der deutschen Soziologie)』(1969年) に収録され広く知られるようになった「実証主義論争」である²³⁾。さらに1968年にフランクフルトで行われたドイツ社会学会大会では、前会長のアドルノの基調講演「後期資本主義か産業社会か (Spätkapitalismus oder Industriegesellschaft?)」に対して現会長のダーレンドルフが論戦を挑んだ [GS 8, 354 ff.]。ここで論点となっていたのは社会学における経験的社会調査の意義、そして社会学の社会的意義であり、ドイツ社会学会の外からの注目も集めた。一連の論争の中でアドルノやハーバーマスが見せた学問の社会的意義に関する洞察は、人文主義的伝統に依拠した精神科学的教育学への批判から生まれた解放的教育学および批判的教育科学 (kritische Erziehungswissenschaft) においても注目された [白銀 2011]。

(2) 社会研究所での教育学的研究

この1959年は、社会研究所において教育を対象とした新たな活動が動き始めた年でもあった。「大学と社会」「学生と政治」と続いた研究所の大規模なプロジェクトが終わりを迎えつつある一方、研究所の教育業務は増大し、ハーバーマスは研究所を去り、大がかりな研究が困難になっていったが [Vgl. Demirović 1999: 435 f.=2009 (vol. 1): 221-223]、それでも教育を対象とした複数のプロジェクトがこの年以降も小規模ながら進められた。まず1959年には成人教育の問題と可能性をテーマとした「市民大学研究 (Volkshochschulstudie)」の準備が進められた [Demirović 1999: 789 f. = 2011 (vol. 4): 150]。この研究の構想はそれ以前にさかのぼり、1953年のホルクハイマー宛てのアドルノの書簡に認められるが [AHB IV, 236 f.]、実際の研究は1960年から62年の間に行われ、ノルトライン・ヴェストファーレン州の市民大学を対象として、その参加者の教育への関心と上昇志向が調査された。その報告は1962年にエルハルト (Heinrich Ehrhardt) によって社会研究所内でまとめられ、1965年に同州の市民大学連盟の名で公になった [Landesverband der Volkshochschulen von Nordrhein-Westfalen (Hrsg.)

1965]。

また大学の学生会 (Studentenschaft) をテーマとした調査研究が1961年から1965年まで行われた²⁴⁾。大学生たちが組織する学生会とそこから選出される代表者のあり方に注目したこの研究は、その「民主主義」の実態を明らかにすることで、学生間だけでなく大学当局との関係、ひいては学生の社会的な政治意識も射程に入れており、これまでの「大学と社会」「学生と政治」に連なる研究といえる。この研究成果はアダム (Heribert Adam) によってフランクフルト社会学叢書の17巻『学生会と大学 (Studentenschaft und Hochschule)』として出版されたが [Adam 1965]、アドルノはこの叢書に序言を寄せ、楽観視しがたい学生の民主主義の実態は社会全体の傾向と密接にかかわっていると説いている [GS 20-2, 664]。

さらに1959年は、政治教育に関する二つの活動が社会研究所で始まった年でもあった。

ひとつはテシュナー (Manfred Teschner) が中心となった研究「授業における政治と社会 (Politik und Gesellschaft im Unterricht)」である。この研究は、これまでの大学生を対象とした教育社会学的研究をギムナジウムへ応用し、生徒の政治意識や態度、教師の授業実践を分析するものとして構想されたが、その後、分析のカテゴリーなどの修正を経て、国民学校、実科学校、職業学校にまで対象が拡大された [Demirović 1999: 789 f.=20011 (vol. 4): 150-151]。この研究の結果として、「人間の本質」という観念が政治教育の阻害要因となっていることなどが明らかとなり、また政治教育の効果をあげるものとして、知識に限定した教育ではなく、社会の内部に作動している諸力へと介入していく教育が提唱された。テシュナーらによるこの研究の成果はドイツ社会学会の教育社会学専門部会でも報告され [Paffrath 1992: 110]、さらにアドルノの序言を付した『授業における政治と社会 (Politik und Gesellschaft im Unterricht)』がフランクフルト社会学叢書の第21巻として出版された [Teschner 1968; Vgl. GS 20-2, 671 ff.]²⁵⁾。

もうひとつは、「政治教育研究事務所 (Studienbüro für politische Bildung)」の設置である²⁶⁾。1959年の夏、アメリカ・ユダヤ委員会の副委員長スローソン (John Slawson) とヨーロッパ担当者のシュスター (Zachariah Shuster) が西ドイツを訪問した [Koinzer 2011: 38 ff.]。彼らの目的は教育を含めた西ドイツの民主化の視察にあったが、彼らはその不徹底を憂慮し、ヘッセン教育省のミンセン (Friedrich Minssen) や政治教育の専門誌『社会・国家・教育 (Gesellschaft-Staat-Erziehung)』の編集者ボブケ (Wolfgang Bobke)、そして旧知の間柄であったホルクハイマーとの接触が果たされ、1962年にこの研究所は社会研究所の附属施設として設立された

[Koinzer 2011: 43 ff.]。所長はミンセンが務め、ヘッセン州やフランクフルト市だけでなくドイツ外務省やフォルクスワーゲン財団、そしてフォード財団などからも支援も受けた [Demirović 1999: 790 ff.=20011 (vol. 4): 151-153]。この事務所の主な目的はアメリカの民主的教育の情報や経験を学者に限らず教育や政治の関係者に提供することであり、学校内の政治教育的な授業にとどまらず教員養成ひいては制度や政治を視野に入れたこと、そしてドイツからアメリカへの研究旅行を実施したことに特徴がある。1960年から65年の間に、1グループあたり6人程度の計10グループがアメリカに渡り、教育現場の視察だけでなく時に現地調査も行い、帰国後に過去の参加者と意見交換を行った。アドルノは自身のアメリカの経験や思想をもとに研究事務所の活動に関与し、研究旅行の参加者との討議に参加してアメリカとドイツのディスカッション文化の違いを説明したり、あるいはグループダイナミクスを推進しようとするミンセンに異議を唱えた [Paffrath: 95 ff.]。結局、社会研究所本来の業務とのギャップや社会研究所の負担の過多を理由として、1965年に事務所は社会研究所から切り離されるのだが（事務所は1971年まで存続）、当時の民主化を企図した教育実践の動向にアドルノも関与していたことの証左といえよう [Vgl. Albrecht 1999b]。いずれにせよ、こうした1959年以降の社会研究所の活動においてアドルノは前面に出てきていないものの、1950年の研究所復興当初からの連続性をうかがわせるものとなっている。

(3) 教育論者としてのアドルノ

そして「アウシュヴィッツ以後の教育 (Erziehung nach Auschwitz)」(1966年)をはじめとするアドルノの教育論が定期的にラジオで発信されはじめたのも1959年からであった。帰国当初からアドルノはラジオやテレビに出演し、上述の音楽教育論や文化批判的な議論を展開していた [Albrecht 1999a]²⁷⁾。だが、そこで知己を得ていたヘッセン放送の教育部門の担当者カーデルバッハ (Gerd Kadelbach) が企画した放送局の新しい番組のシリーズ「現在の教育問題 (Bildungsfragen der Gegenwart)」によって、1959年からその没年まで「年に一回は」[EzM, 7 ff.] アドルノの教育をめぐる対談や講演が放送されることとなった。『批判的モデル集 (kritische Modelle)』や『成人性への教育』に収録された講演や対談など、彼の教育論の多くはここで発信されたものである。

1959年に成立したものとしてすでに言及した「ドイツの大学の民主化」や「半教養の理論」もラジオで放送されたが [Albrecht 1999a: 234 f.]、アドルノが政治的発言も辞さない批判的な社会学者として知られるようになったのは、その放送された状況も含めて、講演「過去

の克服とは何か」によるところが大きい [GS 10-2, 555 ff.]。この講演はもともとキリスト教徒とユダヤ教徒の共存を企図したキリスト教・ユダヤ教共同会議 (Koordinierungsrat für Christlich-Jüdische Zusammenarbeit) の大会で1959年の秋に行われたものであった。そして「私がより恐ろしいと思っているのは、民主主義に対立してナチズムが生き残っているのではなく、民主主義の只中にナチズムが生き残っていることです」[GS 10-2, 555: 下線部はアドルノによる強調] という講演冒頭のアドルノの言葉を裏づけるかのように、ケルンの落書きにはじまる反ユダヤ主義の顕在化が起こったのだった。この講演は連邦議会でこの問題が議題として取り上げられる2月18日の直前、1960年2月7日にヘッセン放送から流された。そして1962年5月には、後に学生運動を主導するようになるドイツ社会主義学生同盟 (Der Sozialistische Deutsche Studentenbund: SDS) の招待に応じ、アドルノは再びこの講演をベルリンで行った [GS 10-2, 816 ff.]。さらに同年10月には「偏見なき人間の教育 (Erziehung vorurteilsfreier Menschen)」がテーマとなったキリスト教・ユダヤ教共同会議の主催の第一回ヨーロッパ教育学会議 (Europäische Pedagogenkongferenz) において「今日における反ユダヤ主義との闘いによせて (Zur Bekämpfung des Antisemitismus heute)」を講演し [GS 20-2, 360 ff.]、これも「現在の教育問題」の一環で放送された。その後もアドルノは「実践教育学における偏見の超克 (Die Überwindung des Vorurteils in der praktischen Pädagogik)」(1963年放送)、「社会理解としての政治教育 (Politische Bildung als Verständnis der Gesellschaft)」(1963年放送)²⁸⁾、「アウシュヴィッツ以後の教育 (Erziehung nach Auschwitz)」(1966年放送) [GS 10-2, 674 ff.]、「教育——何のために (Erziehung –wozu?)」(1966年放送、ベッカーとの対談) [EzM, 105 ff.]、「野蛮を脱するため教育 (Erziehung zur Entbarbarisierung)」(1968年放送、ベッカーとの対談) [EzM, 120 ff.]、「成人性への教育 (Erziehung zur Mündigkeit)」(1969年放送、ベッカーとの対談) [EzM, 133 ff.] といった講演や対談をヘッセン放送から発信し、「過去の克服」と教育を論じる批判的知識人として広く知られるようになった²⁹⁾。

ただし、「現在の教育問題」で話題とされたのは、過去の克服だけではない。「半教養の理論」の問題意識をふまえたものとしては、「教養と半教養の間の社会 (Die Gesellschaft zwischen Bildung und Halbbildung)」(1961年放送、アドルノとベッカーの対談) や「無教養のイデオロギーによせて (Zur Ideologie der Unbildung)」(1966年放送、アドルノとベッカーの対談) がある [Paffrath 1992: 135 f. u. 173 f.]。また学校の教師を扱ったものとして、ギムナジウムの教師における哲学の意義を語った

「哲学と教師 (Philosophie und Lehrer)」(1961年放送) [GS 10-2, 474 ff.]、教師の権威主義とコンプレックスをテーマにした「教職を支配するタブー (Tabus über Lehrberuf)」(1965年放送) [GS 10-2, 656 ff.] とそれを受けた対談「教職とそのタブー (Der Lehrberuf und Seine Tabus)」(ベッカー、ハイドルン (Heinz-Joachim Heydorn) との対談、司会はカーデルバッハ、1965年放送) がある。そして以前の成人教育論につながる議論としては、1963年には対談「テレビと教養 (Fernsehen und Bildung)」(ベッカーとの対談、カーデルバッハの司会) が放送されている [EzM, 50 ff.]。これらの講演や対談には、これまでのアドルノの教育をめぐる研究や経験が反映されており、たとえば教師論には帰国当初から携わっていた高等学校教員採用試験の哲学面接試験を想起した発言が認められ、また「テレビと教養」においても成人教育とともに1950年代初頭のテレビ研究への言及もある。講演や対談という形式で成立したゆえに原典はほとんど挙げられていないが、これまでのアドルノと社会研究所の成果を背景としてアドルノの教育論が成立したのだった。

6. アドルノの晩年

ここでは、これまで取り上げなかったアドルノの晩年について簡単に辿るにとどめたい。

1950年代の終わりから60年代の初頭には貴重な出会いに恵まれた。作家ベケット (Samuel Beckett) との出会い、また文学者ションディ (Peter Szondi) の仲介による詩人ツェラン (Paul Celan) との交流はアドルノにとって大きな恵みとなった。哲学的人間学で知られるゲーレン (Arnold Gehlen) が公私にわたる議論のパートナーとなり [Müller-Doohm 2003: 572 ff.=2007: 477-480]、「社会学は人間の科学か (Ist die Soziologie eine Wissenschaft für vom Menschen?)」(1965年対談) に代表される社会学的な二人の対談がテレビやラジオで放送された。

1960年代のアドルノは上述の講演「過去の克服とは何か」もひとつの契機となり、戦後の復古主義的動向に対抗する批判的知識人として広く知られるようになった。ハイデガーとその弟子たちに向けられたアドルノの批判はよく知られている。フランクフルト大学の1961-62年冬学期の哲学講義「存在論と弁証法 (Ontologie und Dialektik)」からハイデガー批判を改めて打ち出したアドルノは [Müller-Doohm 2003: 655=2007: 548]、1963年のヘルダーリン学会で当時支配的だったハイデガーのヘルダーリン解釈を批判し [GS 11, 447 ff.]、翌年の『本来性という隠語——ドイツ的イデオロギーについて (Jargon der Eigentlichkeit. Zur deutschen Ideologie)』

ではハイデガーの弟子である哲学者・教育学者ボルノウ (Otto Friedrich Bollnow) らの憤激を買った。また「過去の克服」に連なる議論として、1967年には第二次大戦中のローマ法王のナチスへの黙認を描いた劇「神の代理人 (Der Stellvertreter)」(1963年) の作者ホーフート (Rolf Hochhuth) との論争も挙げることができる。ナチズムの罪責を個人に問いかけるホーフートの作品に対し、アドルノは個人の自由が存在しない時代においてはヒトラーさえ「下手くそな喜劇役者 (Schmierenkommödiant)」でしかないと述べ、個人の自由を前提とした演劇という芸術形式の困難を指摘した [GS 11, 591 ff.]。

だがアドルノがその一翼を担ったこの批判的な知的風潮の中で、アドルノ自身も批判の対象となっていた。1963年には、亡命前に親ナチ的な雑誌『音楽 (Musik)』に小論を載せたことを学生新聞『ディスクルス (Diskurs)』誌上で非難され、アドルノは情勢を読み誤っていたと弁明した [GS 19, 637 ff. Vgl. Müller-Doohm 2003: 218 f.=2007: 214-215]。またユダヤ教神学者でベンヤミンの旧友だったショーレム (Gershom Scholem) とともに『ベンヤミン書簡集 (Walter Benjamin Briefe)』(1966年) を編纂したが [Benjamin 1966]、1968年にはベンヤミンの著作集と遺稿集の編纂方針についてアレント (Hannah Arendt) とハイゼンビュッテル (Helmut Heißenbüttel) の批判を受け、反論に努めた [Müller-Doohm 2003: 693 ff.=2007: 581-584]。そしてこの時期と前後して、アドルノを死に至らしめたともいわれる1960年代末の学生紛争、いわゆる「68年運動 (Die 68er Bewegung)」をめぐる辛苦がアドルノにとって大きなものとなっていった。

この運動で主導的な役割を果たした SDS は、1950年代末からアドルノの思想を自らの理論的根拠のひとつと認めていた。SDS の学生たちは『啓蒙の弁証法』の海賊版を手に入れ、アドルノの講義にも参加し、またアドルノ自身も SDS の招待に応じて講演を行っていた。社会研究所の所員も SDS の関係者が多かった [Vgl. Kraushaar 1998]。60年代の中盤から SDS はドイツの議会外野党 (Außerparlamentarische Opposition: APO) の中心となり運動は急進化していくが、そこにアドルノは理論——アドルノからすればそれも実践であるが——への軽視と決断主義を認め、距離を取るようになる。アドルノよりも SDS と密接な関係にあったハーバーマスも、1967年6月にハノーファーでの学生集会で「左翼ファシズム (linker Faschismus)」という挑発的な表現を用いて運動の急進性を批判した。その翌月にアドルノはベルリン自由大学でゲーテに関する講演を左翼学生たちに一時妨害される経験をした。1968年には学生たちとの討論会に出席し、時に講義や演習の時間も使いながら

SDSの学生との対話に時間を割き、学生の政治的デモや大学運営への学生参加に理解を示していたが、理論という実践の重要性を説き続けるアドルノは、学生運動の象徴となっていたかつての僚友マルクーゼとは異なり、学生運動の攻撃のターゲットとなっていく。1968年末の大学のゼミ棟の占拠に続き、社会研究所も1969年1月に学生グループの侵入を受け、アドルノは所長として警察の出勤を要請したが、その行動が運動側の憤激をさらに招いた。1969年夏学期の講義も学生グループによる妨害によって中止した。こうした心労の重なる状況の中、アドルノは1969年8月6日、休暇先のスイスで心筋梗塞によってこの世を去った。

この時期のアドルノは多くの著作を世に送った。哲学的著作としては、『ヘーゲル哲学の諸局面』に論文を追加した『三つのヘーゲル研究 (Drei Studien zu Hegel)』(1963年)、上述の『本来性という隠語』、そして哲学的名著とされる『否定弁証法 (Negative Dialektik)』(1966年)が挙げられる。『否定弁証法』ではその哲学的考察よりも、「ヒトラーは自由を失った人間たちに新しい定言命法を強いた。それは、アウシュヴィッツが繰り返されないように、似たことが再び起きないように、人間は自らの思考と行為を整えなければならない、というものである」[GS 6, 358]、あるいは「アウシュヴィッツ以後の文化はすべて、それに対する切実な批判も含めて、ゴミ屑である」[GS 6, 359]といったメッセージ性の強い文言が人口に膾炙した。社会学的著作としては上述の『ドイツ社会学における実証主義論争』のほか、ホルクハイマーとの共著『ゾチオロギカ II (Soziologica II)』(1962年)がフランクフルト社会学叢書の第10巻として出版され、「半教養の理論」もここに収録された。また文芸批評としては『文学ノート』の第二巻(1961年)と第三巻(1965年)を出版、文化批評としては『プリズメン』に続く小論集『模範像なしに——美学小論 (Ohne Leitbild. Parva Aesthetica)』(1962年)、そして『批判的モデル集』と総称される『介入——九つの批判的モデル集 (Eingriffe. Neun kritische Modelle)』(1963年)と『キーワード——批判的モデル集 2 (Stichworte. Kritische Modelle 2)』(1969年)がある。この『批判的モデル集』には、ラジオでも放送されたアドルノの教育論のうち「過去の克服とは何か」「哲学と教師」「教職を支配するタブー」「アウシュヴィッツ以後の教育」を収録している。なお自らの美学思想を体系化した未完の大作『美の理論 (Ästhetische Theorie)』(1970年)が死の翌年に出版され、注目を集めた。

この時期には音楽を扱った著作も多く公にしており、『音響の型 (Klangfiguren)』(1959年)、『マーラー——音楽観相学 (Mahler. Eine musikalische Physiognomik)』(1960年)、『幻想曲風に (Quasi una fantasia)』(1963年)、

『忠実なコレペティートル——音楽実践の教材集 (Der getreue Korrepetitor. Lehrschriften zur musikalischen Praxis)』(1963年)、『楽興の時——音楽小論集 (Moments musicaux, Neu gedruckte Aufsätze 1928-1962)』(1964年)、『即興曲——第二音楽小論集 (Impromptus. Zweite Folge neu gedruckter musikalischer Aufsätze)』(1968年)³⁰、『ベルク——極微なる移行の巨匠 (Berg. Der Meister des kleinsten Übergangs)』(1968年)を出版した。また体系的な音楽社会学の著作『音楽社会学序説——十二の理論的講義 (Einleitung in die Musiksoziologie. Zwölf theoretische Vorlesungen)』(1962年)は彼の「構造的聴取」の概念をよくうかがわせるものとして知られている。

ところで、こうした彼の音楽論の中でもとりわけ教育的に興味深いのが『忠実なコレペティートル』である。この著作でアドルノは「構造的聴取」を可能にする音楽教育の実践のあり方を、『不協和音』の「音楽教育学によせて」よりも詳細かつ具体的に提示している。この著作は序文によると一部は1940年ごろのラジオ調査プロジェクトの成果であり、また帰国後に音楽大学やラジオを通して公にしてきた楽曲分析も収録している。メロディを覚えればまずはよしとする主旋律の偏重、作曲者の個人的エピソードを通した作曲者の人生への共感、あるいは反対にソナタ形式など楽曲の形式を覚え込ませ演奏できるようにする強制的な技術の教授——こうした音楽教育をアドルノは否定する。アドルノが評価するのは、たとえば子どもの口ずさむ民族歌謡 (Volkslied) にも根本動機の反復と変奏があることに気づかせるような教育である [GS 15, 169]。アドルノは「音楽の進行を追跡し、ひとつの器官 (Organ) を駆使し、この進行を共に成就させることができなければならない。ここでいう器官は、発達の中で力をつけるものであり、偶然と連合とを識別する (sondern sich von Akzidentien und Assoziationen) ものであるが、しかしこれは単なる教育の結果というよりも、むしろ常に教育の前提でもある」と述べる [GS 15, 167]。この「器官」の教育がありうるとすれば、たとえば子どもの聴取や演奏に寄り添い、楽曲の進行にコメントを加えながらその動的構造に気づかせていくようなものとなるだろう。アドルノは実際にその音楽活動の初期から亡命からの帰国後も、クラシックのコンサート番組でコメンテーターを務めたり、楽曲を実際に流しながらの講演を続けていたが [GS 18, 555 ff.]、『忠実なコレペティートル』の教育論はアドルノ自身の活動によって裏付けられていたといえよう。

おわりに

アドルノの教育論は音楽教育論と1950年代後半からの

教育一般を扱ったものに二分できるが、本論では彼の生涯を追いながらその二つの成立の背景を明らかにした。まず彼の音楽教育論は、1920年代から亡命期にかけてのウィーン楽派との交流や映画音楽への取り組みが基盤となっており、基本的に社会研究所とは異なる独自の文脈で展開された。また青年運動と連動していた共同体志向の音楽教育に対してアドルノは亡命前から一貫して批判的であったが、その批判をナチズムと結びつけるのは、「過去の克服」を論じる1960年代よりも前であることは改めて注目されてよい。ナチズムの共同体志向に対する批判を音楽教育の動向に単に転用するのではなく、また音楽教育における音楽固有の論理の欠如を作曲家の立場から批判するクシェネクとも異なり、アドルノが戦後いち早く音楽教育批判を展開できたのは、音楽に社会的媒介を認めるその芸術観がひとつの理由かもしれない。

それに対して1950年代後半からの一般的な教育論の背景には、亡命時代にはじまる社会研究所内での（構想に留まったものも含めて）幾多の研究があった。アドルノの教育論には教育をめぐる権威や偏見への批判が散見されるが、その洞察の背景にはアメリカでの研究の産物である『権威主義的パーソナリティ』だけでなく、帰国後の社会研究所での研究成果もあったといえる。そしてドイツでの再建後の社会研究所では大学教育と学校教育はいずれも研究対象として継続して位置づけられていたが、アドルノの直接的な関与や着想の関連性をそこに認めることが可能である。

社会研究所が教育を研究対象としたその理由は、亡命時代から継続する戦後ドイツの民主化への関心にあった。それを主導したのは確かにホルクハイマーであったが、ドイツ帰国後も社会研究所でその実務をこなしたのはアドルノであり、1960年代の教育論におけるアドルノの民主主義への肯定的な態度は、「過去の克服」以前の社会研究所の活動にすでに見出すことができる。他方で「過去の克服」をめぐる発言を以て、アドルノのユダヤ的アイデンティティを過大評価することは慎まねばならないだろう。アドルノの思想には「図像化禁止 (Bilderverbot)」などのユダヤ的なものがしばしば登場し、また「過去の克服」をめぐるはその災禍を受けた者として（あるいはその代弁者として）語ってはいるが、彼自身が自らをユダヤ人と理解し、その思想をユダヤ的に構築したとはいえない。クラカウアー、ベンヤミン、ホルクハイマー、シェーンベルクといったユダヤ的出自を持つ人々の間で思想を彫琢し、哲学や芸術論などではそうした影響をしばしば見せるアドルノであるが、1960年代以降の教育論については実践的で政策的な発言を厭わなかった。自らのユダヤ的なものを参照しつつ「過去の克服」を論じるのではなく、社会学者として、そして戦後ドイツの民主化という観点から論じるその視座が、

アドルノの教育論に他の著作とは異なる実践志向を導き入れたのだと推察される。ただし、アドルノの教育論には「社会的強制（権威主義・偏見・ステレオタイプなど）の批判的啓蒙としての教育による民主化の推進」という主題にとどまらないものも散見される。それはむしろ音楽教育論あるいは教養論や教師の哲学を語ったものなどにかがえようが、その詳細な分析は別の機会に行いたい。

注

- 1) 伝記的資料として、本論文では Müller-Doohm 2003を主に参照し、適宜 Claussen 2005, Jäger 2005などを併用した。
- 2) フランクフルト学派の活動の歴史については、ここでは主に Demirović 1999, Jay 1973, Wiggershaus 2001を主に用いた。またアドルノの戦後の教育論についてその状況を含めて位置づけている先行研究として、Albrecht. a. 1999, Koinzer 2011を参照した。
- 3) 「テオドル・ルードヴィヒ」という洗礼名は前者が父方の祖父、後者が母の弟に由来するという。彼自身は幼年期から「テディ (Teddy)」と呼ばれるのを好んでいた [Müller-Doohm 2003: 33f.=2007: 26-28]。
- 4) 『社会研究誌』は1932年の第1巻はライプツィヒで印刷されたが、1933年の第2巻第1号からは社会研究所の国外移転に伴いパリのフェリックス・アルカン社で印刷されていた。しかしドイツによるパリ占領によって、1939年の第八巻第三号からニューヨークで印刷せざるを得なくなった。この時から雑誌は英語のタイトル『哲学・社会科学研究 (Studies in Philosophy and Social Science)』誌となり、使用言語も英語となった。
- 5) 若い頃のアドルノはユダヤ的なものへの共感を持っていなかった [Müller-Doohm 2003: 36 f.=2007: 28-30]。「半ユダヤ人」としてのアドルノの状況については井上2006を参照。
- 6) ライヒ (Willi Reich) 編『アルバン・ベルク (Alban Berg. Mit Bergs eigenen Schriften und Beiträgen)』(1937年)には、ベルクの8つの作品を扱ったアドルノの楽曲分析が掲載された。
- 7) 主なものとしては「音楽における物神的性格と聴取の退化 (Über den Fetischcharakter in der Musik und die Regression des Hörens)」(1938年)、「ヴァーグナー断想 (Fragmente über Wagner)」(1939年)、「キルケゴールの愛の教説 (On Kierkegaard's Doctrine of Love)」(1940年)、「ポピュラー音楽について (On Popular Music)」(1941年)、「今日のシュペングラー (Spengler Today)」(1941年)、「ヴェブレンの文化攻撃 (Veblen's Attack on Culture)」(1941年)が挙げられる。音楽論だけでなく文化批評も論じていたことに注目できる。
- 8) ここにはベンヤミンの遺稿「歴史の概念について (Über den Begriff der Geschichte)」、ホルクハイマーの「理性と自己保存 (Vernunft und Selbsterhaltung)」「権威主義的国家 (Authoritärer Staat)」などのほか、かつてベンヤミンから最も称賛されたアドルノの論稿のひとつである「ゲオルゲとホーフマンスタール (George und Hofmansthal)」が掲載された。
- 9) この研究は1942から44年にかけてハンス・アイスラー

- (Hanns Eisler) と進められるが、1947年の『映画音楽の作曲 (Composing for the films)』出版時には共著者として名を挙げるのをアドルノは断念した。アイスラーのソビエト・マルクス主義の政治態度から距離を取るためであったともいわれるが、この著作については竹峰2007を参照。
- 10) 厳密に言えば、1941年の『哲学・社会科学研究』誌に掲載されたプロジェクト名は“Research Project on Antisemitism”と表記されているのに対し [ZfS IX 1, 124 ff.], 1943年から着手されたこのプロジェクトは、“Research Project on Anti-Semitism”となっている [MHA IX 101-112]。
 - 11) 「偏見の研究」は次の通りである。第一巻：アドルノ、フレンケル=ブルンスヴィク、レヴィンソン、サンフォード『権威主義的パーソナリティ』(1950年)、第二巻：ベッテルハイム、ヤノヴィッツ (Morris Janowitz) 『偏見のダイナミズム——復員軍人の心理学的・社会学的研究 (Dynamics of Prejudice. A Psychological and Sociological Study of Veterans)』(1950年)、第三巻：アッカーマン (Nathan W. Ackerman)、ヤホダ (Marie Jahoda) 『反ユダヤ主義と情緒障害——精神分析的解釈 (Anti-Semitism and Emotional Disorder. A Psychoanalytic Interpretation)』(1950年)、第四巻マッシング『破滅のリハーサル——ドイツ帝国における政治的反ユダヤ主義の研究 (Rehearsal for Destruction. A Study of Political Anti-Semitism in Imperial Germany)』(1949年)、第五巻：レーヴェンタール、グーターマン (Norbert Guterman) 『欺瞞の預言者——アメリカのアジテーターの技術の研究 (Prophets of Deceit. A Study of the Techniques of the American Agitator)』(1949年)。
 - 12) アドルノの反ユダヤ主義的プロパガンダの研究は、1943年に執筆された「マーティン・ルーサー・トーマスのラジオ演説の心理学的テクニック (The Psychological Technique of Martin Luther Thomas' Radio Addresses)」(1943年執筆、死後公刊)をはじめとして、複数挙げることができる。この論文をはじめとした当時のフランクフルト学派のプロパガンダ研究については竹峰 2007の「補論1 啓蒙とプロパガンダの弁証法」を参照。
 - 13) ホルクハイマー資料館 (Max Horkheimer Archiv) では、ドイツの再教育にかかわる資料は「戦後ドイツの再構築 (特に再教育) に関する研究プロジェクトとメモ (Forschungsprojekte und Memoranden zur Umgestaltung Nachkriegsdeutschlands, besonders zur Umerziehung)」として扱われており、その期間は1942年から1949年までとなっている [MHA IX 172]。
 - 14) Vgl. Memorandum on the Elimination of German Chauvinism. MHA IX 172. 27. 戦後ドイツの民主化のための再教育という構想は「戦後ドイツの刷新と文化の機能 (Deutschlands Erneuerung nach dem Krieg und die Funktion der Kultur)」(1943年ごろ)にもうかがえる [HGS 12, 184 ff.]. ただしホルクハイマーはこの再教育を単なるドイツ教育制度のアメリカ化とはとらえていなかった。基本的にドイツの精神科学的伝統 (それがナチズムにつながったこともふまえつつも) への共感を示している。「インターヨーロッパ・アカデミーのプログラム (Programm einer intereuropäischen Akademie)」(1944~45年ごろ)も参照のこと [HGS 12, 195 ff.]。
 - 15) この時期に執筆されたテレビ研究としては「テレビ論序説 (Prolog zum Fernsehen)」(1953年)、「イデオロギーとしてのテレビジョン (Fernsehen als Ideologie)」(1953年)、ホロスコープ研究としては「二番煎じの迷信 (Aberglaube aus zweiter Hand)」(英語版は1957年、註などを省略したドイツ語版は1962年)、「地上に墜ちた星 (The stars down to earth)」(1958年)がある。
 - 16) その一端はドイツへの帰還の最初期に行われた1948年6月8日のフランクフルト大学における講演「大学の理念 (Die Idee der Universität)」(後に「哲学と研究 (Philosophie und Studium)」に改題)にうかがうことができる [Demirović 1999: 144=2011 (vol. 4): 38]。また1951年11月14日の社会研究所再開の式典においてホルクハイマーは、古典哲学と最新の経験的社会研究とを研究と教育において融合することによって、社会研究所を批判と変革への発信源とすると宣言した [Vgl. Demirović 1999: 326 ff.=2009 (vol. 1): 108-121]。その一環として研究所内では、大学や学部垣根を越えた横断的研究、そして大学にとどまらないドイツの教育制度に対する研究が議論され [Vgl. Demirović 1999: 372 ff.=2009 (vol. 1): 156-165]、政策的提言も行われた [Vgl. Demirović 1999: 371 f.=2009 (vol. 1): 155]。
 - 17) ホルクハイマーの1952年夏学期入学許可式演説「学術的研究 (Akademisches Studium)」と1952-53年冬学期入学許可式演説「Bildung の概念 (Begriff der Bildung)」が、アドルノが草案を作成したものである。ただしいずれもホルクハイマーによる修正が大幅に入っている [Paffrath 1992/ 白銀 2008]。
 - 18) 1953年と1954年にフランス国営放送とドイツのヘッセン放送で放送されたラジオ講義である [MHA IX 28-29]。
 - 19) これは市民大学の全国的な会議であり、ここでのアドルノの講演は『ツァイト』誌に掲載された際には「冗句なき啓蒙 (Aufklärung ohne Phrasen)」というタイトルであった。
 - 20) この研究のアイデアの起源は、アメリカ時代の「ドイツの狂信的愛国主義者の除去に関するメモ」にさかのぼることができよう。そして後に『キーワード』に掲載された1969年のアドルノの講演「余暇 (Freizeit)」にそれは反映されたといえるかもしれない。この講演では余暇と文化産業の共犯関係を批判しその意識化が提唱されている。
 - 21) なお、アドルノは翌年の1960-61年冬学期の社会学演習において、教育社会学的な教養分析を行っている [Demirović 1999: 789=2011 (vol. 4): 150]。
 - 22) 後にアドルノは1965年11月の学会大会の同部会で「芸術社会学へのテーゼ (Thesen zur Kunstsoziologie)」という講演を行った [GS 10-1, 367 ff.]。ただしこの講演には教育学的な議論は乏しい。その趣旨はかつて『音楽社会学序説』で展開した楽曲理解の方法論を芸術一般に応用したものだといえる。
 - 23) アドルノ、アルバート (Hans Albert)、ダーレンドルフ、ハーバーマス、ピロット (Harald Pilot)、ポパーの共著であり、学会で発表した「社会科学の論理 (Zur Logik der Sozialwissenschaften)」(初出は1962年)と本書の「序論 (Einleitung)」がアドルノ執筆によるものである [PdS]。
 - 24) アドルノの序文によれば、1960年の研究所の経営会議の席上でのラエフスキー (Boris Rajewski) の提言でスタートした [GS 20-2, 661 ff.]。

- 25) なお、このほかに「フランクフルト社会学叢書」として出版されアドルノの序言を付されたものとして、ラングの『政治的ペスタロッツ (Der politische Pestalozzi)』(1967年、第18巻)がある [Rang 1967]。
- 26) この事務所名の表記は Koinzer 2011に従った。
- 27) アドルノの登場した社会学的な講演や対談としては、上述の「啓蒙は救いとなるのか」や、ホルクハイマーとともに論じた「判断と偏見 (Urteile und Vorurteile)」(1956年放送)などが挙げられるが、その数は限られたものであった [Albrecht 1999a]。
- 28) Vgl. Paffrath 1992: 100 ff. ただしこのタイトルはアドルノ自身がつけたものではなく、アドルノはこの講演を「政治教育の概念 (Begriff der politischen Bildung)」と呼んでいたようである [Paffrath 1992: 166]。
- 29) アドルノの登場したラジオ番組は194件、テレビ番組は24件を数え(1945年~1990年、死後の(再)放送を含む)、その数は他の知識人と比しても、ホルクハイマー(ラジオ119件、テレビ35件)と並んで極めて多い [Albrecht 1999a: 231]。そのうち120件程度が1960年代に集中している [Albrecht 1999a: 230]。
- 30) 『即興曲』には1932年の「楽師音楽への批判 (Kritik des Musikanten)」(『フランクフルト新聞 (Frankfurter Zeitung)』掲載)も収録されている [GS 17, 222 ff.]。

主要参考文献

〈一次文献〉

- AP: Adorno, T. W., Frenkel-Brunswik, E., Levinson, D. J., Sanford, R. N.: *The Authoritarian Personality*, New York 1969. (アドルノ, Th. W. (1980) 『権威主義的パーソナリティ』田中義久・矢沢修次郎・小林修一訳、青木書店。)
- AHB: Theodor Wiesengrund Adorno und Max Horkheimer Briefwechsel. 4 Bde. Gödde, Ch., u. Loniz, H. (Hrsg.), Frankfurt am Main 2003-2006.
- EzM: Adorno, Th. W.: *Erziehung zur Mündigkeit. Vorträge und Gespräche mit Hellmut Becker 1959-1969*. Kadelbach, G. (Hrsg.), Frankfurt am Main 1971. (アドルノ, Th. W. (2011) 『自律への教育』原千史・小田智敏・柿木伸之訳、中央公論新社。)
- GS: Theodor Wiesengrund Adorno *Gesammelte Schriften*. 20 Bde. Tiedemann, R., Adorno G., Buck-Morss, S. u. Schultz, K. (Hrsg.), Frankfurt am Main 1971-86.
- HGS: Max Horkheimer *Gesammelte Schriften*. 19 Bde. Schmidt, A. u. Schmid Noerr, G. (Hrsg.), Frankfurt am Main 1985-1996.
- PdS: Adorno, Th. W., Albert, H., Dahrendorf, R., Habermas, J., Pilot, H., Popper, K.: *Der Positivismusstreit in der deutschen Soziologie*, 5. Auflage, Darmstadt und Neuwied 1976. (アドルノ, Th. W. (1992) 『社会科学の論理——ドイツ社会学における実証主義論争』城塚登・浜井修・遠藤克彦訳、河出書房新社。)
- SE: Institut für Sozialforschung: *Soziologische Exkurse. Nach Vorträgen und Diskussionen*, Hamburg 2013. (フランクフルト社会研究所 (1983) 『現代社会学の諸相——社会学理論への補遺』山本鎮雄訳、恒星社厚生閣。)
- ZfS: *Zeitschrift für Sozialforschung 1932-1941*, 9 Jgg., München 1980.
- MHA: Max Horkheimer *Archiv der Stadt- und Universitätsbibliothek Frankfurt am Main*.

〈二次文献 (欧文)〉

- Albrecht, Cl. (1999a): *Die Massenmedien und die Frankfurter Schule*. In Ders. u. a.: *Die intellektuelle Grundung der Bundesrepublik. Eine Wirkungsgeschichte der Frankfurter Schule*, Frankfurt am Main/ New York, S. 203-246.
- Albrecht, Cl. (1999b): *Im Schatten des Nationalsozialismus: Die politische Pädagogik der Frankfurter Schule*. In Ders. u. a.: *Die intellektuelle Grundung der Bundesrepublik. Eine Wirkungsgeschichte der Frankfurter Schule*, Frankfurt am Main/ New York, S. 387-447.
- Albrecht, Cl./ Behrmann, G. C./ Bock, M./ Homann, H./ Tenbruck, Fr. H. (1999): *Die intellektuelle Grundung der Bundesrepublik. Eine Wirkungsgeschichte der Frankfurter Schule*, Frankfurt am Main/ New York.
- Adam, H. (1965): *Studentenschaft und Hochschule. Möglichkeiten und Grenzen studentischer Politik*, Frankfurt am Main. (Frankfurter Beiträge zur Soziologie. 17.)
- Benjamin, W. (1955): *Walter Benjamin Schriften*. Hrsg. von Theodor W. Adorno und Gretel Adorno unter Mitwirkung von Friedrich Podszus. 2 Bände, Frankfurt am Main.
- Benjamin, W. (1966): *Walter Benjamin Briefe*. Hrsg. und mit Anmerkungen versehen von Gershom Scholem und Theodor W. Adorno, Frankfurt am Main.
- Claussen, D. (2005): *Theodor W. Adorno. Eine letztes Genie*, Frankfurt am Main.
- Demirović, A. (1999): *Der nonkonformistische Intellektuelle. Die Entwicklung der Kritischen Theorie zur Frankfurter Schule*, Frankfurt am Main. (デミロヴィッチ (2009-11) 『非体制順応的知識人——批判理論のフランクフルト学派への発展』仲正昌樹監訳、全四分冊、御茶ノ水書房。)
- Habermas, J./ von Friedeburg, L./ Oehler, Ch./ Wetz, Fr. (1967): *Student und Politik. Eine soziologische Untersuchung zum politischen Bewusstsein Frankfurter Studenten* [1961], 2. Aufl., Neuwied am Rhein.
- Jäger, L. (2005): *Adorno. Eine politische Biographie*, München. (イエーガー, L. (2007) 『アドルノ——政治的伝記』大貫敦子・三島憲一訳、岩波書店。)
- Jay, M. (1973): *The Dialectical Imaginations. A History of the Frankfurt School and the Institute of Social Research 1923-1950*, Boston. (ジェイ, M. (1975) 『弁証法的想像力——フランクフルト学派と社会研究所の歴史 1923-1950』荒川幾男訳、みすず書房。)
- Koinzer, Th. (2011): *Auf der Suche nach der demokratischen Schule. Amerikafahrer, Kulturtransfer und Schulreform in der Bildungsreformära der Bundesrepublik Deutschland*, Bad Heilbrunn.
- Kraushaar, W. (1998): *Frankfurter Schule und Studentenbewegung. Von der Flaschenpost zum Molotowcocktail 1946 bis 1995*. 3 Bände, Hamburg.
- Landesverband der Volkshochschulen von Nordrhein-Westfalen (Hrsg.) (1965): *Zum Verhältnis von Aufstiegshoffnung und Bildungsinteresse*, Dortmund.
- Müller-Doohm, S. (2003): *Adorno. Eine Biographie*, Frankfurt am Main. (ミュラー=ドーム, S. (2007) 『アドルノ伝』徳永恂監訳、作品社。)

- Paffrath, H. -H. (1992): Die Wendung aufs Subjekt. Pädagogische Perspektiven im Werk Theodor W. Adornos, Weinheim.
- Rang, A. (1967): Der politische Pestalozzi, Frankfurt am Main. (Frankfurter Beiträge zur Soziologie. 18.)
- Teschner, M. (1968): Politik und Gesellschaft im Unterricht. Eine soziologische Analyse der politischen Bildung an hessischen Gymnasien, Frankfurt am Main. (Frankfurter Beiträge zur Soziologie. 21.)
- Wiggershaus, R. (2001): Die Frankfurter Schule. Geschichte - Theoretische Entwicklung - Politische Bedeutung [1988], 6. Aufl., München.
- Ziege, E. -M. (2009): Antisemitismus und Gesellschaftstheorie. Die Frankfurter Schule im amerikanischen Exil, Frankfurt am Main.

〈二次文献 (邦文)〉

- 石田勇治 (2002) 『過去の克服——ヒトラー後のドイツ』白水社。
- 井上純一 (2006) 「拒否されたアイデンティティ——『ハルプユーデ』としてのアドルノ」立命館大学国際関係学会『立命館国際研究』第18巻第3号、121-138頁。
- 遠藤孝夫 (2004) 『管理から自律へ——戦後ドイツの学校改革』勁草書房。
- 白銀夏樹 (2005) 「アドルノの大学批判に関する一考察——大学の学生と組織における合理化の問題を中心として」中国四国教育学会『教育学研究紀要 (CD-ROM 版)』第50巻、12-17頁。
- 白銀夏樹 (2008) 「アドルノの Bildung 批判に関する一考察——草稿「Bildung の概念について」を手がかりとして」中国四国教育学会『教育学研究紀要 (CD-ROM 版)』第53巻、34-39頁。
- 白銀夏樹 (2011) 「教育学におけるアドルノ研究の動向について」『広島文化学園大学学芸学部紀要』第1号、41-52頁。
- 白銀夏樹 (2015) 「アドルノ教育論の社会心理学的基盤——自我形成をめぐる問題に焦点を当てて」関西学院大学教職教育研究センター『教職教育研究』第20号、45-61頁。
- 竹峰義和 (2007) 『アドルノ、複製技術へのまなざし——〈知覚〉のアクチュアリティ』青弓社。
- 丸山恭司 (2006) 「米国占領政策理念としての『再教育』——フランクフルト学派によるドイツ人再教育案から」中国四国教育学会『教育学研究紀要 (CD-ROM 版)』第52巻、84-89頁。

※訳語については一次文献から筆者が訳したが、既刊の邦訳のあるものは適宜参照した。

※本研究は JSPS 科研費25780497の助成を受けたものである。

(しろかね なつき・関西学院大学准教授)